

小玉重夫（監修）
田中伸／豊田光世（編）

『対話的教育論の探究—子どもの哲学が描く民主的な社会』

東京大学出版会、2023 年
272 頁、4,200 円（税別）

本書『対話的教育論の探究—子どもの哲学が描く民主的な社会』は、10 編の論文からなる「子どもの哲学 Philosophy for Children」に関わる論文集である。子どもの哲学に関わる書籍は多いものの、いわゆる論文集は珍しく、子どもの哲学について語り、考える際に必読の書であることは間違いのないであろう。

本書は二部構成になっており、第一部は「教育を通じた P4C の理念の再検討」、第二部は「教育実践と P4C の対話」と題されている。一般的な傾向としては、第一部は理論パートであり、第二部は実践パートと読むことができる。しかし、第一部の各論考も決して抽象的で理論的であるだけでなく、常に教育実践が意識されている。このことは、本書の大きな美点の一つであり、子どもの哲学の理論に興味がある読者だけでなく、子どもの哲学や対話的学習に興味をもつ現場の教員、実践者にも多くの示唆を与えるものであろう。

本書の特徴の一つには、多様な出自の書き手が論考を寄せているという点がある。日本において

は不幸にも深い亀裂のある各分野の研究者と「現場」教員が一つの著書に集まり、「研究会を積み重ね」た成果である（3 頁）。このことが本書の幅広さと読み応えに貢献している。

内容が多様であるからこそ、読者は自分の興味関心に基づいてどの章からでも読むことができる。その際に、編者の一人である豊田光世の「あとがき」は大いに参考になるであろう。そのため、読み始める際には「はじめに」はもちろん、「あとがき」を最初に読むことをお勧めしたい。本書全体の見取り図を頭にいれることができる。

本書が想定する読者、本書をオススメしたい読者はどのような人であろうか。本書は子どもの哲学と深い関わりがある。しかし、もう一人の編者である田中伸は、「はじめに」の冒頭で次のように書いている。

本書は、Philosophy for Children (以下、P4C と略記) を唯一絶対で正しい教育論として提案するものではない。【中略】つまり、P4C を視点に、教育論を改めて見つめ直すものである。(1 頁)

この宣言は、本書全体を貫く一つの柱のように思える。10 編の論考はすべて、何らかの仕方ですべての子どもとの関係をもっている。

周知のように、日本における「子どもの哲学」や「哲学対話」は、アメリカ・ハワイ州を中心に実践されてきた p4cHII に大きな影響を受けており、本書の著者達にも大きな影響を与えている。

しかし、本書で展開される議論は、子どもの哲学を称揚したり、p4cHII のやり方や理念を単に紹介するものではない。それらを前提としながらも、

理念や実践の中に存在する「ままならなさ」（第4章）をとらえ、その中で考えていくものである。

その点でも本書の各論考の専門性は高く、初学者が容易に読み進めることのできるものではない。特に、本書は P4C（子どもの哲学）をもとに「教育を改めて見直す」ことを一つの目的としている。そのため、子どもの哲学の基本的知識や感触を（各論考にも補助的な説明があるものの）すでに持っている人が典型的な読者層となるだろう。逆に、子どもの哲学の理論や実践に触れたことのない読者にとってはそのポイントが掴みづらく、まずは他の文献に当たる方が良いかもしれない。言ってみれば、本書は、子どもの哲学という教育実践が広く普及し、多くの書籍を簡単に手に取れるようになった現在だからこそ可能になった書物であり、ここ 10 数年の子どもの哲学活動の最新成果と呼ぶにふさわしいものである。

それを象徴するのが、第6章の西山溪による論考である。ここでは、自らが行った教室での探究実践を後から振り返る形で議論が進んでいる。西山も含め、本書の著者たちの多くは「子どもの哲学の支持者」（135頁）であろう。しかし、だからといって、それをただ称揚するのではなく、一旦立ち止まって、メタ的な視点から考えなおすことでより良いものを目指していく。

子どもの哲学を含め、新しい教育実践は「成功譚」に溢れている。素晴らしい現場の実践を見て、素晴らしい実践の報告を聞いて、人々は新しい教育実践を自分の学校、現場に取り入れようと努力する。華々しい取り組みが注目される影で、現場での悩みや格闘、上手くいかなさは注目されず、覆い隠されてしまう。新しい教育実践が広がる過程ではこれも致し方ない現象ではあるだろう。

しかし、本書が示していることは、子どもの哲学に関して国内での議論はその段階を終えたのだ、ということだ。西山が行っているように、成功譚として記述された実践の中にある問題に再び目を向け、それをあぶり出し、新たな思考と実践に向かうこと。これこそが本書の目指したものであり、達成したことなのだ。

このように本書が達成している学術的水準は非常に高く、読み応えもある。本書の読者は、私を含め、これまでの実践を改めて振り返り新たな思考と実践に向かうことをしなければならない。その意味で、本書は、未来の研究、未来の実践を作る基礎資料なのである。

村瀬智之（東京工業高等専門学校）